

PELDでのInterlaminar approachにおける注意点 Critical operative points for the Interlaminar approach of PELD

古閑 比佐志、稲波 弘彦

L5/S1に生じた腰椎椎間板ヘルニアに対するPELDでの手術アプローチは、iliac crestが侵入経路を阻む場合が多いため、Interlaminar approachが選択されることが圧倒的に多い。しかしInterlaminar approachはtransforaminal approachと異なりsafety triangleのような侵入に関する安全領域が無いいため、各症例でDRやMRI, 3D-CTを用いた術前の手術検討が重要である。また脱出した髄核が大きいと鏡筒が容易に硬膜管と神経根の間に設置され、摘出操作中に神経損傷を生じる可能性が高まる。一方、Interlaminar approachはこれまでに慣れ親しんだMED法あるいは顕微鏡下髄核摘出術に似た侵入経路をとるため、一旦神経根を同定した後は比較的スムーズに摘出操作を進めることも可能である。これまでの演者のInterlaminar approachの経験から、このようリスクを回避し安全に手術を遂行するための注意点がいくつか明確になった。それらは黄色靭帯の切離方法や鏡筒の侵入方法だけでなく術中のC-armの使い方なども含んでいる。本講演ではこれらの点に関して症例を用いて解説し紹介する。